

いわゆる「長崎製」の輸出漆器に関して

伏彩色螺鈿技法を用いた漆器を中心に

On the Lacquerware what was Called "Made in Nagasaki"

日高 薫

はじめに

- ①18世紀から19世紀の輸出漆器
- ②初期長崎様式の漆器
- ③後期長崎様式の輸出漆器
- ④伏彩色螺鈿技法を用いた国内向け漆器
- ⑤伏彩色螺鈿技法の源流と展開

おわりに

【論文要旨】

本稿は、一般に長崎製とみなされてきた、18世紀第4四半期から19世紀にかけての輸出漆器の様式と技法に注目し、その制作時期や産地に関する問題について考察を行う。

いわゆる「長崎製」の輸出漆器の実例は、きわめて広範だが、これらは二つの様式に大別される。ひとつは、精細な蒔絵技術と螺鈿技法を併用した西洋銅版画写しのプラーク類、およびアメリカ向け輸出漆器であり、18世紀の第4四半期から1920年代まで制作されたと考えられる。いまひとつは伏彩色の螺鈿技法を用いた華やかな様式の大型家具や箱類であり、現在のところ制作年代を確定できる例は1840年代以降のものに限られている。

筆者は、おもに後者の様式がどのように成立し展開したかに注目して、貝の下に彩色を施す螺鈿技法が中国に起源をもつこと、それが17世紀の輸出品に僅かだが既に用いられていることを指摘するとともに、後者の様式が文化7(1810)年に既に完成しており、輸出品に先立ち国内市場向けに制作されていたことを明らかにした。前者と後者の様式の漆器は、一時期並行して制作販売されていたが、両者を分かつのは時代による様式の変化だけではなく、制作地もしくは工房、もしくはそれらを作らせ販売した漆器商の違いによるものと推測される。近年前者の様式を京都製とする説が提出され議論を呼んだが、本稿では基本的にこの説を支持する立場をとりながら、江戸後期における複雑かつ多彩な螺鈿漆器制作の容態を解き明かそうと試みる。